

高校生用日本語語彙理解力テストの開発

— (1) 試作問題の精選 —

平 直樹・小野 博・林部 英雄

日本語に関し特別な指導を必要とする帰国子女の日本語能力を簡便に測定するテストの開発が急務となっている。

小野他(1989)は小学生及び中学生用に、日本語能力のうち、語彙、文型、作文、漢字等の評価基準を作成している。そのうち、語彙と漢字については高校生段階以上のテストの作成が容易である。それ意外の領域については、中学生段階で発達が完成するものがほとんどであり、作文については、大量の統計的処理が困難である。

今回の研究は高校生用語彙テストの項目の一部を作成するのが目的である。項目の作成・改良には、予備調査と本調査の2段階を経た。

まず、将来の中学生用語彙テストと連続する尺度をにらみ中学生用の項目も含めて、まず、90項目を作成した。予備調査として、1991年5月、東京都内の中堅上位私立女子高校に依頼し、一年生から三年生まで計約270名の被験者にテストを行った。古典的テスト理論に基づき、項目得点と総得点との相関関係から簡便な項目分析を行った結果、一部改良した項目も含め、本調査

用に73項目を選択した。

本調査では、全国の28の高校計約18,000名の被験者にテストを行った。協力校の内訳は、東京都内の有名私立進学校3校、全国の中堅上位公立普通科高校21校、地方の商業高校1校、農業高校3校である。

得点率は、平均54.79、標準偏差12.53であり、全体として高校生段階の標準的なテストの作成に成功したと考えられる。次に、項目分析を行った。項目得点と総得点の相関関係と同時に、得点から5段階に被験者(1段階について被験者約3,300名から3,900名)を分類し、選択肢毎の選択率の情報も合わせて56項目を良好項目として選択した。

小学生及び中学生用の項目は項目反応理論に基づいて尺度化されている。今後、項目反応理論に基づいて中学生用項目と連続した尺度化を行う。また、項目を増やして、最終的には数百項目からなるテストを作成し、帰国子女の語彙能力を判定するための適応型テストに組織化して、帰国子女の進学指導、語彙能力発達の追跡調査等に役立てたい。